

北海道近現代史研究会・第一回現地視察レポート

―函館市・松前町・江差町を訪ねて

正木 浩 司

はじめに

公益社団法人北海道地方自治研究所では二〇一九年度より、所内に「北海道近現代史研究会」を設置し、蝦夷地・北海道の近世期から現代に至る歴史をあらためて調査・研究し、自治（制度、機構、区割りなど）や産業・インフラ形成などの視点を中心に、北海道の歴史を多角的に再構築する事業に着手している。研究会の活動は、毎年度ごとに大枠のテーマを設定し、①「研究者や専門家などを講師に招いての学習会」と、②「主に道内の史跡・施設等の現地視察」を二つの柱として進めることを基本方針としている。

こうした基本方針のもと、活動二年目に当たる二〇二〇年度は、大枠のテーマを「近世期の蝦夷地の歴史」とし、その上で、日口（幕府―ロシア帝国）関係、幕藩体制とアイヌ民族との関係、幕

府と松前藩の関係、アイヌ民族・社会の状況などを中心に調査・研究を進めることとしている。

このようなテーマでの活動の一環として、研究会では二〇二〇年八月五日～八日、第一回目となる現地視察を実施した。今回は、松前町に存する松前藩関係の史跡などをメインの視察先としながら、時間のゆるす限り、その近隣の市町でも史跡・施設の視察を行ってきた。研究会として念頭に置いたテーマは、松前藩の歴史、日口関係史、箱館戦争などである。本稿はこの松前町をはじめとする道南での視察について概括的に報告するものである。

1. 箱館戦争の痕跡を辿って

今回の視察では、メンバーは各自、一日目（八月五日）の夜までに函館市内に入り、翌朝集合して、揃ってレンタカーで松前町へ向かうという段

取りにした。メンバーの中には正午前に函館市入りをした者も数名（筆者も含め）いたため、共に同市内の史跡・施設などを可能な限り巡ることにした。この日の移動には主に函館市電を利用し、函館山の周辺地区にある史跡・施設を順次訪問した。

函館市電の軌道は、「十字街」停留場（末広町）で二線に分岐し、函館山を囲むようにして、一方は山の東側に位置する「谷地頭」停留場（谷地頭町）方面へ、もう一方は山の北側に位置する「函館どつく前」停留場（入舟町）方面へ向かう。

東側終点の「谷地頭」停留場で降車後、函館山の麓に位置する函館八幡宮方面へ向かい、同神社を過ぎ、さらに坂道を上って称名寺という寺を過ぎたところに、一つの史跡がある。「碧血碑」である。この碑は、明治維新にあたって勃発した新政府軍と旧幕府軍の内戦である「戊辰戦争」（一八六八～六九年）、特にその最終局面となった「箱

<付表> 第1回現地視察の主な視察先

第1日目(8/5)

	史跡・施設名	所在地
1	碧血碑	函館市谷地頭町
2	市立函館博物館本館	函館市青柳町17-1
3	高田屋嘉兵衛銅像	函館市宝来町9
4	旧ロシア領事館	函館市船見町17-3
5	函館ハリストス正教会	函館市元町3-13
6	北海道坂本龍馬記念館	函館市末広町8-6
7	箱館高田屋嘉兵衛資料館【休館中】	函館市末広町13-22

第2日目(8/6)

	史跡・施設名	所在地
1	松前藩屋敷	松前町西館68
2	寺町エリア	松前町字松城
3	松前公園 松前城天守閣(松前城資料館)	松前町字松城
4	松前町郷土資料館	松前町明神30
5	白神岬展望広場	松前町字白神
6	国鉄旧松前線松前駅跡	松前町字博多

第3日目(8/7)

	史跡・施設名	所在地
1	開陽丸記念館【臨時休館】	江差町字姥神町1-10
2	旧関川家別荘	江差町字豊川町55
3	旧中村家住宅	江差町字中歌町22
4	江差町郷土資料館	江差町字中歌町112
5	旧江差駅資料展示館/旧江差駅跡	江差町字陸屋町165
6	木古内町郷土資料館(いかりん館)	木古内町字鶴岡74-1

第4日目(8/8)

	史跡・施設名	所在地
1	五稜郭タワー	函館市五稜郭町43-9
2	五稜郭跡 復元・箱館奉行所(市立函館博物館 五稜郭分館)	函館市五稜郭町44

館戦争(一八六九年春)の旧幕府軍側の戦死者約八〇〇人を弔うために、一八七五年に建立されたものである。視察時、碑の下にたくさんのお花が供えられていたのが印象に残った。

碑を去り、山伝いに北へ一五分ほど歩くと、「函館公園」の一角、「市立函館博物館(青柳町)の裏手」に出る。ここは本館の位置づけで、館所蔵品の一部は、テーマ別に市内数カ所の他の文化施設に展示されているとのこと。今回の視察時には、折良く期間限定の「収蔵資料展箱館戦争」が開

催中であり、同戦争に関する所蔵品の数々を観覧することができた。特に、「蝦夷共和国」、「箱館政権」などとも称される榎本武揚ら旧幕府軍が箱館に樹立した政府機構については、その組織図なども展示されていた。総裁は選挙で選ばれたとも伝えられており、民主主義や自治という視点との関係で強い印象が残る。箱館戦争については後段で再度触れたい。



碧血碑

2. 函館市内に残るロシアの史跡

冒頭でも紹介したとおり、今次視察のテーマに日ロ関係史を一つ据えていた。近世期の蝦夷地においては、一八世紀末頃から本格化するロシア帝国の南進の動き、幕末期の日露間条約の締結に伴う箱館開港、これらに対する幕府の蝦夷地政策の動向(探検隊派遣・調査、幕領化による防備の強化など)が、大きな歴史のうねりをつくりだしていた。そして、現在の函館市内には、近世期にこの地に展開されたロシア帝国の活動に関わる史跡がいくつか遺されている。

函館山の北側に位置する市電のもう一つの終点「函館どつく前」停留場で降車し、函館山中腹の山上大神宮に至るやや急な坂道「幸坂」を上っていくと、同神社の手前右手に、レンガの赤色と縁取りの白漆喰の二色が映える美しい建物が現れる。「旧ロシア領事館」である。

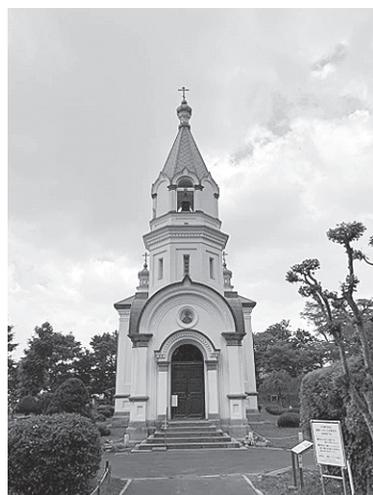
幕府とロシア帝国の間に「日露和親条約」が結



旧ロシア領事館

ばれたのが一八五五年、「日露修好通商条約」の締結が一八五八年。条約により箱館が開港となり、一八六〇年には国内初のロシア領事館が函館の地に開設され、初代ロシア領事ゴシケーヴィチが職務を開始した。幕末箱館の状況の特徴付ける風景であろう。

現在の建物は、現在地への移転、二度の火災での焼失、日露戦争による作業中断などの紆余曲折を経て、一九〇八年に完成したものである。戦後、外務省の所管時代を経て、一九六四年に函館市が買い取り、一頃は宿泊研修施設「函館市立道南青



函館ハリストス正教会・聖堂

年の家」として活用されていたが、一九九六年以降は外観を眺めるだけの史跡として扱われている。次に、坂を下り、東へ少し進むと、異国情緒が色濃く漂う市内屈指の観光エリア（末広町）が現れる。このエリアに「函館ハリストス正教会」がある。

同教会のウェブサイトによると、初代聖堂はロシア領事館付属聖堂として一八六〇年に建立され、翌年にはロシアから聖ニコライが来て、司祭に着任した。「ハリストス」はキリストのロシア語発音だと司馬遼太郎の著書で知ったが、ロシア伝来ということは宗派はカトリックではなく東方正教会であり、ここが日本国内における東方正教会の伝道の始まりの地になったという。

初代聖堂は一九〇七年の函館大火で焼失しており、現存する聖堂は二代目で、一九一六年に建立され、現在に至る。一九八三年には国の重要文化財の指定も受けている。

函館とロシアとの関係で言えばもう一つ、高田



高田屋嘉兵衛銅像

屋嘉兵衛（一七六九〜一八二七年）にも触れておく必要がある。淡路島出身ながら、廻船商人として蝦夷地に進出し、箱館を活動拠点に、国後島・択捉島間の航路開拓にも功績のあった人物だが、一八一一年に発生した、いわゆる「ゴローニン事件」に巻き込まれ、いったんはカムチャッカに連行されるものの、事件解決に尽力したことで知られる。同事件が発生した一九世紀初頭は、日露関係が緊張感を高めていた時期だったが、この事件の解決により一定の落ち着きもたらされたとき、日露関係の平定に高田屋嘉兵衛が当時果たした役割は大きかったと言える。

函館市内には現在、市電「宝来町」停留場付近、護国神社坂のグリーンベルトに、高さ三層の「高田屋嘉兵衛銅像」（宝来町）がある。一九五八年に箱館開港百周年を記念して建てられたもの。同じ敷地内には二〇〇〇年建立の「日露友好の碑」もある。

また、前出の市電「十字街」停留所から港の方を見やると、建物の一つに「高田屋嘉兵衛通り」の垂れ幕が見られた。この建物が面する通りを直進していくと、程なく「箱館高田屋嘉兵衛資料館」(末広町)という私設の資料館の前に出る。市ウェーブサイトの公式観光情報によると、嘉兵衛の私設造船所や北前船に関する史料などが多数展示されているとのことだが、今回の視察で訪れた際は新型コロナウイルス感染症拡大問題の影響で休館中であり、残念ながら内部の観覧は叶わなかった。

このほか、「十字街」停留所付近にはもう一つ、幕末の有名人の関係施設がある。「北海道坂本龍馬記念館」(末広町)である。同停留場を挟んだ向かいには坂本龍馬の銅像もある。なぜ函館に龍馬の記念館があるのか意外に感じるが、龍馬自身は蝦夷地への移住・開拓の夢を持っていたとされ、彼の甥に当たる直寛は北見に移住し、後には浦臼に移住し、蝦夷地開拓に尽力した。同記念館は坂本家と蝦夷地開拓の関係などを周知することを主な目的に、NPO法人が二〇〇九年に創設したものである。このテーマについての探求は別の機会に譲る。

3. 松前町内を巡り、松前藩の歴史を学ぶ

視察二日目、当初の予定通り、早朝からレンタカーでJR函館駅から松前町へと向かった。所要約二時間の道のり。

今回の松前町視察では、前もって松前町観光協

会にガイドをお願いしており、観光協会事務所にうかがう約束になっていた。事務所は「松前公園」から北東に少し離れた場所に位置する観光施設「松前藩屋敷」の受付窓口を兼ねており、同施設の入りにある。今回は、ガイド役の男性が一人付き、藩屋敷の観覧から始まって、公園北側のエリア、公園内の各所を散策しながら、公園中央に位置する「松前城天守閣／松前城資料館」までを案内する、約一時間半のコースであった。

最初に観覧した「松前藩屋敷」は、松前藩時代の城下町の町並みを再現したテーマパークである。敷地内に一四棟の町屋などが再現されており、江戸時代の松前の庶民生活や、北前船商人の生活や商業活動の一端を垣間見ることが出来る。

藩屋敷の観覧を終えると、霧雨が舞うなか、公園の北側のエリアへ移動。ここにはかつて「寺町」と呼ばれたエリアであり、五つの仏寺、すなわち、法源寺、法幢寺、龍雲院、光善寺、阿吽寺が現存する。このうち松前家の菩提寺は法幢寺(曹洞宗)で、寺の裏手には歴代藩主らの墓所がある。この「松前藩主松前家墓所」には松前家始祖の武田信広から一九代の藩主、その妻子などの墓が五五基あり、墓碑は覆屋がある独特の形をしたものが多い。一九八一年に国指定史跡に指定されている。

松前家の前身である蛸崎家の菩提寺は法源寺(曹洞宗)であり、絵画『夷酋列像』で知られる藩家老・蛸崎波響の墓所はここにある。日本の種痘法の祖とされる中川五郎治(一七六八〜一八四

八年)の墓もここにあるとされるが、ガイドによると、確証にはまだ至っていないとのこと。五郎治は一八〇七年、択捉島で「フヴォストフ事件」に遭遇し、ロシアの捕虜にされた際、ロシアで牛痘種痘を身につけ、前出の「ゴローニン事件」の際に送還された後は、松前藩などに仕官しながら、種痘法を普及させた。この関係で、寺町エリアには日本医史学会などが一九九八年に建立した「中川五郎治顕彰の碑」があり、その功績を讃えている。



中川五郎治顕彰の碑

寺町の散策を終えると、現在は桜の名所として広く知られる「松前公園」内に入り、いよいよ「松

前城」の天守閣へ。公園中央部に位置する天守閣の内部は、現在は「松前城資料館」として整備されており、松前藩や当時の松前のまちに関する様々な史料を観覧することができる。

松前城の天守閣は一八五四年に完成した国内最後の日本式城郭とされ、一九四一年に国宝指定を受けたが、一九四九年に火災で焼失し、現在の天守閣は一九六一年に再建されたものである。城の保存への取り組みは町の整備計画のもと現在進行形で続いている。



松前城の天守閣と本丸御門

4. 暴風の江差町へ

松前町内の旅館に一泊し、視察三日目は早朝から江差町へ移動。箱館戦争を視察テーマの一つとしていることから、まず「開陽丸記念館」(姥神町)へ向かった。

施設名にある「開陽丸」は幕府が幕末期に建造した当時最新鋭の軍艦で、箱館戦争を戦った榎本武揚ら旧幕府軍の旗艦として知られる。同記念館は、この開陽丸の遺物や史料を展示している。展示スペースは復元された開陽丸の船体の内部にあり、海上に係留されている。その手前に位置する陸上の「開陽丸青少年センター」内に記念館の入館案内所があり、入館者は案内所で所要の手続きをした上で、棧橋を渡り、復元開陽丸へ入っていくことになる。

しかし、今回の視察で同記念館を訪れたとき、江差町は最大瞬間風速三〇級の暴風に見舞われており、棧橋を渡るのに危険が伴うとの理由で、記念館は折悪しく臨時休館とされてしまっていた。したがって、残念ながら記念館内部の観覧は今回は叶わず、復元開陽丸の外観を遠目に眺めるにとどまった。オリジナルの開陽丸は、榎本ら旧幕府軍が一八六八年一月に江差攻めを行った際に出撃し、そこで暴風雪に遭って座礁・沈没したとされる。今次視察時の暴風は開陽丸沈没当時の状況を現地である程度実感させられた貴重な経験かもしれないと思い直し、次の機会に期することにした。



復元された開陽丸の外観

青少年センターを去った後は、海沿いよりは風も幾分穏やかな内陸方面へ向かい、「旧関川家別荘」(豊川町)、「旧中村家住宅」(中歌町)の観覧を経て、「江差町郷土資料館」(中歌町)へ。町立の郷土資料館として古代から現代に至る幅広い展示物を有する施設だが、ここの特徴はまずその建物自体にある。この建物は元々は旧檜山爾志郡役所の庁舎であり、これを一九九〇年代後半に修復したものである。町のウェブサイトによると、檜山爾志郡役所は一八八七年に創設され、檜山郡と爾志郡を管轄したほか、郡役所としての役目を終えた後も、江差警察署、江

差町役場分庁舎などに使われ続けたという。道内では唯一、現物が残る郡役所の建物である。

郡は明治・大正期に存在した、府県のもとで町村を管轄する地方行政機構の一つであり、北海道内でも、「北海道」命名（一八六九年八月）に伴い一八八六郡が置かれて以降、「郡区町村編成法」（二八七八年）に基づき役所も配置されたが、一九二六年までに廃止され、現在では町村部の地名として残るのみである。道内の郡制度の展開や区割りの変遷などについては別の機会に詳しく探求したい。



江差町郷土資料館(旧檜山爾志郡役所)

5. 視察の終わりに五稜郭跡を訪問

視察最終日の四日目、帰りの特急が出るまでのわずかな時間ではあったが、筆者単独で、「国指定特別史跡 五稜郭跡」（一九五二年指定）を訪れた。「五稜郭」は幕府が一八六六年に築造した五芒星型の洋風城塞であり、箱館戦争では榎本ら旧幕府軍が奪取し、自らの拠点とした場所である。

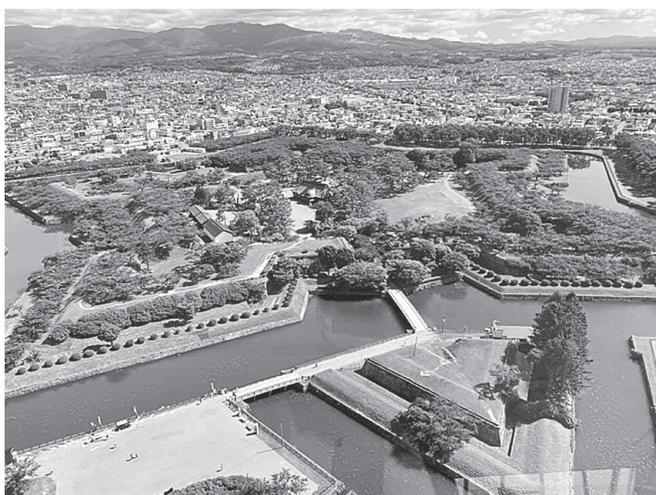
現在の五稜郭跡は「五稜郭公園」として整備・開放され、その中央には、復元された「箱館奉行所」の建物がある。箱館奉行は江戸幕府の遠国奉行の一つで、江戸時代に二期の設置実績があった。

第一次は一八〇〇年代初頭の蝦夷地の第一次幕領化時代（一八〇二〜二年）に際して設置されたもので、一八〇二年二月に「蝦夷奉行」の名で設置され、同年五月に「箱館奉行」に改称され、一八〇七年に松前に移転されて「松前奉行」に改称され、一八二一年二月をもって廃止された。五稜郭にあったのは、幕府が箱館開港（一八五三年）を機に二度目の蝦夷地上知を行ったときに置かれた、第二次の箱館奉行である。当初は函館山の麓に置かれ、五稜郭完成後にその中央部に移転された。明治維新期の一八六八年四月以降は、新政府設置の箱館裁判所および箱館府の庁舎として使用されたが、同年一〇月に榎本ら旧幕府軍に奪取されている。

現在の箱館奉行所の建物は二〇〇六年着工、二〇一〇年完成の復元物。前出の市立函館博物館の

五稜郭分館という位置づけで、館内には箱館奉行所の組織、主要任務、事業、産業創出などに関する資料のほか、箱館戦争や復元作業に関係する史料・資料も多数展示されている。

また、公園のすぐ横には民間事業者が経営する「五稜郭タワー」が設置されており、高さ一〇〇m超のタワーの展望室に上がれば、広大な公園の全貌を俯瞰できるほか、展望室内に資料も多数展示され、ここでも、五稜郭、箱館奉行所、箱館戦争などに関する幕末・維新期の函館市史の一端を学ぶことができる。



五稜郭跡（タワー展望室からの俯瞰）



復元された箱館奉行所（市立函館博物館五稜郭分館）

6. まとめに代えて

現地視察に行くにあたっては、当然のことながら、限られた時間内に足を運ぶべきところを優先度をつけて絞り込んでおく必要があるため、事前の下調べが極めて重要である。しかし、どれだけ下調べを尽くしても、現地に行つて初めて気づくこと、現地であらためて知的好奇心を刺激されることも多々ある。現地視察によって得られる新たな情報はもちろん充実したものになるが、それと同時に

新たな課題や問題意識も多々発生するものである。

今回の現地視察を通じては、特に、松前藩の歴史、幕府の蝦夷地直轄化と統治機構、幕末の箱館でのロシアの活動、箱館戦争の旧幕府軍側の状況などについて一定の知見を得る一方、近世期の蝦夷地ないし道南地域で展開した松前藩と幕府の関係、明治期以降の道内で展開した地方制度・行政区画の沿革、ロシア南進と蝦夷地・北海道開拓（開発）の関係、これらの論点が現代の北海道の抱える諸課題、すなわち、国による開発の継続と地域社会・地方自治のあり方、多民族共生社会の構築については、引き続き詳細な探求を要するテーマとして問題意識を新たにしたところである。

北海道近現代史研究会では今後も道内を中心とした現地視察の実施を予定しており、新たな知見と課題がさらに得られることを期待している。

【注】

- (1) 研究会の正式名称を「北海道近現代史研究会」としたのは二〇二〇年度（二〇二〇年四月）からであり、初年度の二〇一九年度は「北海道史研究プロジェクト」の仮称で活動を始めていた。
研究会メンバーは、押谷一（酪農学園大学教授／当研究所理事／研究会主査）、竹中英泰（旭川大学名誉教授／当研究所理事）、三輪修彪（一般社団法人北海道労働文化協会理事／当研究所元専務理事）、正木浩司（当研究所研究員／研究会事務局長）の四人。
- (2) 司馬（二〇〇八）六七頁。

【参考文献・資料】

- ・ 押谷一「北海道の自治に関する地政学的視点からの論考」（『北海道自治研究』第六一八号九〜一五頁所収）北海道地方自治研究所、二〇二〇年七月
- ・ 司馬遼太郎「街道をゆく（15）北海道の諸道」朝日新聞出版・朝日文庫、新装版二〇〇八年
- ・ 鈴江英一「北海道町村制度史の研究」北海道大学図書刊行会、一九八五年
- ・ 竹中英泰「近世期の蝦夷地における日口関係史について―現代の北海道の地方自治との関わりを中心に―」（『北海道自治研究』第六二〇号二〜一四頁所収）北海道地方自治研究所、二〇二〇年九月
- ・ 谷本晃久「北海道開拓の光と影―「開拓」と「地方自治」をめぐる―」（『北海道自治研究』第六一四号二〜一五頁所収）北海道地方自治研究所、二〇二〇年三月
- ・ 中村健之介「宣教師ニコライと明治日本」岩波書店・岩波新書、一九九六年

【参照ウェブサイト】

- ・ 開陽丸記念館
<http://www.kaiyou-maru.com/>
 - ・ 函館市公式観光情報は「はこだて」
<https://www.hakobura.jp/>
 - ・ 函館・五稜郭タワー
<https://www.goryokaku-tower.co.jp/>
 - ・ 函館ハリストス正教会
<https://www.orthodox-hakodate.jp/>
 - ・ 北海道江差町の観光情報ポータルサイト
<https://esashi.town/>
 - ・ 北海道坂本龍馬記念館
<http://www.ryoma1115.com/>
 - ・ 北海道文化資源データベース
<https://www.northernross.co.jp/bunkashigen/index.html>
 - ・ 北海道松前藩観光奉行
<http://www.asobube.com/>
- ※ 最終閲覧は、いずれも二〇二〇年十一月三日。

へまやぎ こっじ・公益社団法人北海道地方自治研究所研究員